

＜世界演劇講座XI＞ “基礎から学べる”

世界演劇思想史論Ⅲ-女性たちのドラマ-

講師＝西堂行人＋笠井友仁

政治の世界は男の論理で成り立っています。その陰でつねに翻弄され、利用されてきたのが女性たちです。

女性の歴史は、とりも直さず「悲劇」の歴史でもありました。現在の視点で古典と呼ばれる名作を見直してみると、驚くほど女性たちが踏みにじられてきたことが分かります。こうした男性主導で進められてきた「歴史」に演劇はどう対応したのか。

今年度はギリシア悲劇から19世紀末の演劇まで取り上げます。その間にシェイクスピアの登場があり、17世紀のフランスの古典主義を経て、近代市民劇の誕生を見ました。この長い演劇史を貫く主題として「女性たちのドラマ」を考えてみようと思います。女性の視点から歴史＝世界演劇史を読み直すと言い換えてもいいでしょう。

ギリシア悲劇では人間の犯罪の原型が描かれています。メディアといえ、子殺しで有名ですが、なぜ彼女は夫に対して、こうした手段を用いて復讐しなくてはならなかったのでしょうか。夫を殺したクリテムネストラや母を殺したエレクトラのようなヒロインもまた女性のドラマを背負っているのです。

シェイクスピアの劇は男性の主人公が舞台を跳梁跋扈します。その中で、固有名詞を持たず、ただ「マクベス夫人」と記されるヒロインには奇妙な存在感をおぼえます。なぜ作者は彼女にデズデモーナやガートルードといった固有名を与えなかったのか。彼女は果たして単独存在としてのヒロインだったのでしょうか。

17世紀のフランス古典悲劇の中で、ラシーヌもまた一貫して女性たちのドラマを描いてきました。そもそもギリシア悲劇を焼き直したラシーヌの悲劇は、二千年以上も隔てて、いったい何を書き加えたのでしょうか。19世紀に近代劇を確立したイブセン劇にも女性は多く登場します。イブセンが日本に翻訳された当時、青鞥社が抬頭するなど、女性作家が大活躍する時代でもありました。イブセン受容が「女性の解放」と結びつけられたのも、こうした背景があったからです。

19世紀に上演されたワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』は古典を基にしたオペラ作品ですし、世紀末の作家オスカー・ワイルドの『サロメ』は鮮烈なヒロインを生み出しました。いずれも古典的な男女の悲劇を扱っています。こうして20世紀に至る演劇史には、高名なヒロイン、気になる女性主人公が数多く登場します。彼女たちのドラマを考えることで、演劇史で論じられてこなかった隠された文脈を探ってみるというのが今年度のテーマになります。

講座は、前半は問題提起のレクチャー、後半はビデオなどを見ながら、受講生とのディスカッションを中心に進めていきます。

-
- [会 場] アイホール JR伊丹駅前／阪急伊丹駅より東へ徒歩7分
住所＝兵庫県伊丹市伊丹2丁目4番1号 電話＝072-782-2000
- [日 程] 6月20日(月)／7月18日(月)／9月26日(月)／10月24日(月)／11月28日(月)
1月30日(月)／2月20日(月) ※5月23日(月)にプレ講座(無料)あり。
- [時 間] 19時15分～21時00分
- [定 員] 25名(申し込み順)
- [受 講 料] 7,000円(全7回) ※各回ごとは1,500円。ただし定員に達した場合はありません。
- [対 象 者] 年齢や演劇経験は問いません。
- [申込方法] 電話またはメールにて以下の必要事項をお伝え下さい。
【必要事項】1.氏名 2.住所 3.電話番号 4.メールアドレス
- [申込み先] 電話＝072-782-2000 (アイホール／火曜日休館) ／メール＝kasai.tomonori@gmail.com
- [締め切り] 2016年6月3日(金)
- [主 催] 世界演劇講座
- [共 催] 伊丹市立演劇ホール

【講義内容】

【プレ講座】 5月23日（月）世界演劇／思想史論の基礎—演劇史を体系的にどう捉えるか（無料）

【第一回】 6月20日（月）メディアは何に復讐したのか エウリピデス作『メディア』は、今日もっとも上演頻度の高い作品です。改作も数多くなされています。なぜこの作品が現代演劇を魅了するのでしょうか。

【第二回】 7月18日（月）シェイクスピアは女性を差別したのか 『マクベス』に登場するマクベス夫人は、なぜ名前が与えられなかったのか。マクベスを唆し、背中を押してダンカン王を殺害させたマクベス夫人は、真の犯人だったのでしょうか。

【第三回】 9月26日（月）ラシーヌはギリシア悲劇に何を書き加えたのか 17世紀のフランス古典悲劇の中で、ラシーヌは女性たちのドラマを描いてきました。ギリシア悲劇を焼き直したラシーヌの悲劇は、二千年以上も隔てて、いったい何を書き加えたのでしょうか。

【第四回】 10月24日（月）イプセンは女性解放の旗手だったのか イプセンの作品には『人形の家』のノーラをはじめ魅力的なヒロインが数多く造形されました。タイトルロールに『ヘッダ・ガブラー』や『海の夫人』といったように、女性主人公が冠された作品も少なくありません。

【第五回】 11月28日（月）ワーグナーはオペラを革新したのか 1993年にパイロイト音楽祭で初演されたハイナー・ミュラー演出の『トリスタンとイゾルデ』は賛否を真っ二つにする問題作でした。ある時期を境にオペラに何が起きているのかを検証します。

【第六回】 1月30日（月）『サロメ』は世紀末に何をもたらしたのか オスカー・ワイルドは世紀末を背景に耽美的で挑発的な作品を世に問いました。なぜこのような風雲児が登場し、サロメのような鮮烈なヒロインが生まれたのでしょうか。

【第七回】 2月20日（月）女性たちのドラマは革命の演劇だったのか 女性は男性主導の政治的世界を峻拒します。その拒絶の向こうにあるのはいったい何だったのでしょうか。まだ女性劇作家によって描かれていなかったヒロインたちに、男性作家たちは何を託したのか。

【講師紹介】

西堂 行人 1954年東京生まれ。演劇評論家。2016年3月に近畿大学教授を早期退職。70年代末からアングラ・小劇場運動に伴いながら批評活動を開始。1980年代後半から海外の演劇祭などを視察し、独自の世界演劇論を構想。1990年より、ハイナー・ミュラーのプロジェクトを組織し、2002年と2003年に「ハイナー・ミュラー／ザ・ワールド」を金沢と東京で開催。同じく1990年より韓国との演劇交流に力を注ぎ、現在「日韓演劇交流センター」の副会長を務める。著書に『演劇思想の冒険』『ハイナー・ミュラーと世界演劇』『韓国演劇への旅』『現代演劇の条件』『劇的クロニクル』他多数。近著に『証言；日本のアングラ』、編著に『近大はマグロだけじゃない！ Alternative KINDAI』がある。

笠井 友仁 1979年生まれ。宮城県仙台市出身。演出家。エイチエムピー・シアターカンパニー所属。NPO 法人大阪現代舞台芸術協会理事長。日本演出者協会会員。代表作に『ハムレットマシーン』（2002年）、『traveler』（2005年）、『Politics! Politics! Politics and Political animals!』（2010年）などがある。2005年に「日本演出者協会若手演出家コンクール優秀賞」受賞。2007年に京都芸術センター舞台芸術賞にノミネート。2008年にTheatertreffen（ベルリン演劇祭）のインターナショナルフォーラムに参加。2014年にアイホールにて上演した『アラビアの夜』の演出にて「文化庁芸術祭新人賞」を受賞。

世界演劇講座2006年→2015年

●世界演劇講座は大阪の日本橋にある近畿大学会館にて国際人文科学研究所主催で始まった。【2006年】→「世界演劇講座I～世界の前衛たち」『劇的狂気の力』ヤン・ファーブル（ベルギー）／『SUZ/O/SUZ』ラ・フーラ・デルス・ハウス（スペイン）／『死の教室』タデウシュ・カントール（ポーランド）／『ハムレットマシーン』ロバート・ウィルソン（アメリカ）／『アルトゥロ・ウィの抑えれば止る興隆』ハイナー・ミュラー（ドイツ）【2007年】→「世界演劇講座II～日本の前衛たち」『奴婢訓』寺山修司（日本）／『水の駅』太田省吾（日本）／『nostalgia』維新派（日本）／『S/N』ダムタイプ（日本）／『TOKYO GEHTO ハード・コア』解体社（日本）【2008年】→「世界演劇講座III～演劇革命の旗手たち」『カフェ・ミュラー』ビナ・パウシユ（ドイツ）／複数上映 唐十郎（日本）／複数上映 呉泰錫（韓国）／『ハムレット』パトリス・シェロー（フランス）／『世界を震撼させた十日間』ユーリー・リュビーモフ（ロシア）【2009年】→「世界演劇講座IV～ハイナー・ミュラー」『ハムレット／マシーン』ハイナー・ミュラー（ドイツ）／『ハムレット』ロバート・ウィルソン（アメリカ）／『ハムレットマシーン』劇団涪波（韓国）／『ハムレットマシーン』練肉工房（日本）／『ハムレットクローン』川村毅（日本）／『ハムレットマシーン』OM-2（日本）／複数上映 ストアハウスカンパニー（日本）【2010年】→「世界演劇講座V～新しい演劇性の演劇性への探求」『カール・マルクス「資本論」第一章』リミニ・プロトコル（ドイツ）／『ルーシー・キャッパロルの三つの人生』サイモン・マクバーニー（イギリス）／『エンター・アキレス』DV8フィジカルシアター（イギリス）／『わたしは血 JE SUIS SANG ～中世妖精物語～』ヤン・ファーブル（ベルギー）／『THE BEE』野田秀樹（日本）【2011年】→「世界演劇講座VI～境界線上の演劇」『無』演出＝岡本章、出演＝大野一雄、観世榮夫（日本）／『Murx den Europäer! Murx ihn! Murx ihn! Murx ihn! Murx ihn ab!』クリストフ・マルターラー（スイス）／『繩-ROPE-』『箱-Boxes-』ストアハウスカンパニー（日本）／『Wendewut』ヨハン・クレスニク（ドイツ）／『変身』松本修（日本）【2012年】→「世界演劇講座VII～ギリシア劇の再生—古代への夢」『オレスティア三部作』ベーター・シュタイン（ドイツ）／『メディア』蜷川幸雄（日本）／『エディプス王』ジュリー・テイモア（カナダ）／『トロイアの女』鈴木忠志（日本）／『プロメテウスの解放』ハイナー・ゲッペルス（ドイツ）【2013年】→「世界演劇講座VIII～世界演劇の名作を知る」イプセン『ペール・ギュント』ベーター・シュタイン（ドイツ）／チェーホフ『かもめ』マールイ劇場（ロシア）／T・ウィリアムズ『欲望という名の電車（映画）』E・カザン（アメリカ）／ベルトルト・ブレヒト『三文オペラ』佐藤信（日本）／三島由紀夫『サド侯爵夫人』岸田良二（日本）●国際人文科学研究所閉鎖に伴い、伊丹市のアイホールに会場を移し、世界演劇講座「世界演劇思想史論」として再出発した。【2014年／世界演劇思想史論I—ギリシア悲劇からイプセン市民劇まで—】→ギリシア悲劇—演劇の誕生／シェイクスピア—演劇の展開／喜劇か悲劇か—フランス古典劇と伝統／『ファウスト』を読む—世界演劇の旅／イプセン—近代市民劇の出発と演劇の取束【2015年／世界演劇思想史論II—20世紀演劇から現在まで—】→チェーホフとロシア演劇／ブレヒト革命と叙事詩的演劇／アルトと不可能性の演劇／ベケットと不条理演劇／60年代—肉体・身体による演劇革命—P・ブルック、J・グロトフスキー／80年代のラディカルズム—ビナ・パウシユ、ヤン・ファーブル／ポストドラマ演劇と未来形の演劇

世界演劇講座は、「次代を担う演劇人」を育成します。